

2017年度の入院患者は、前年度と同様、各科の医師が担当医として診療した。庄野副院長が院長に就任した関係で、外科医2名、消化器科医2名、腎臓内科医1名、それと10月に就任した内科医（麻酔科医）1名の計6名で対応した。外来は藤岡が水曜日と金曜日の週2回担当した。なお、数年前より医師とコ・メディカルスタッフ全員が診療に当たる“協働診療制度”をとっているが、年数を重ねるごとにその習熟度が増していることを実感している。

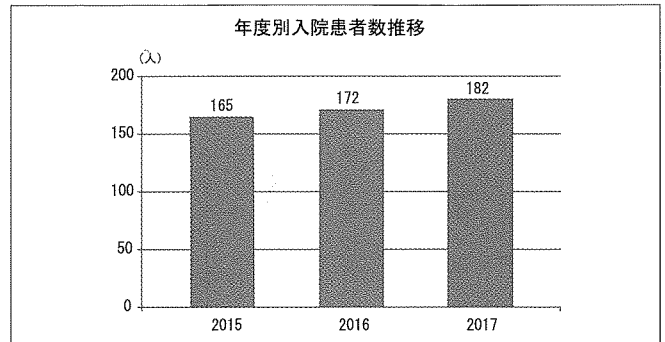
表1に示すように、入院患者総数は僅かではあるが増加傾向にある。前年度の入院患者総数は182例で、その内訳は表2に示すように、脳卒中（脳梗塞・TIA、脳出血、くも膜下出血）が最も多い119例であったが、全体に占める割合は65.4%で前年度（64.5%）と変わりなかった。そのほか、頭部外傷関連（外傷性くも膜下出血、外傷性脳出血、急性硬膜下血腫、慢性硬膜下血腫、びまん性軸索損傷、脳挫傷、脳振盪）25例（13.7%）、めまい21例（11.5%）、てんかん・症候性てんかん6例（3.3%）、正常圧水頭症4例（2.2%）、その他（パーキンソン病、頸髄症・低酸素脳症、大脳皮質基底核変性症、片頭痛、失神）7例（3.8%）であった。正常圧水頭症4例のうち3例には髄液短絡術を行った。入院患者の中には、済生会熊本病院や天草地域医療センターからリハビリ目的で回復期リハビリテーション病棟に紹介された脳関連患者が毎年50人近く含まれているが、リハビリ入院患者数の維持に大きく影響している（表3）。

外来の延べ患者数は2,786例で、前年度の2,336例を大きく上回った（表4）。人口減少の中で外来患者数が増加した要因は不明であるが、最近「脳卒中の出前講座を聴いて受診しました」という患者さんが増えている印象があり、日頃の地道な予防普及活動が実を結びつつあるように思われる。

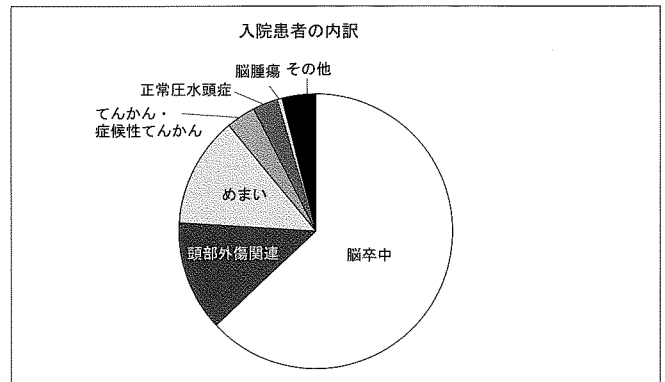
以上をまとめると、当院の診療圏である三角・上天草地域では人口減少が著明であるにもかかわらず、脳卒中患者を含めた脳・神経疾患患者は外来・入院とも増加傾向にある。このことは両地域の高齢化の中で脳卒中やそのほかの脳・神経疾患に対するニーズが依然として高いことを示しており、この傾向は当分続くことが予想される。

今後も、脳疾患専門医を中心にした多職種による“協働診療”。質・量ともに充実したリハビリテーション。それと看護師やソーシャルワーカーによる手厚い退院支援。さらには訪問リハビリや通所リハビリなどによるアフターケアからなる総合的な脳卒中診療をさらに充実させ、当地域住民の健康向上にこれまで以上に貢献していきたいと考えている。

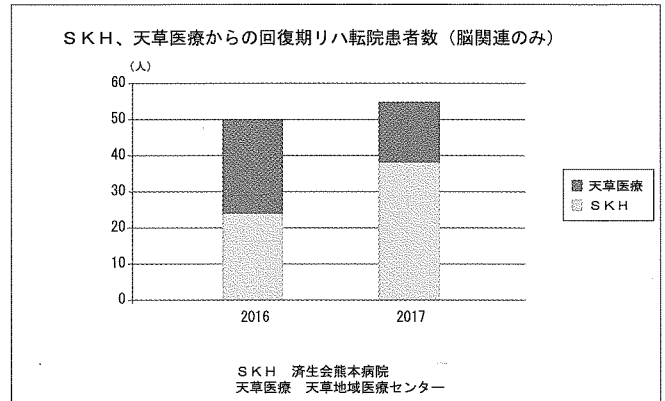
(表1)



(表2)



(表3)



(表4)

